利尻の医療

離島の現実

医師は一人の「道立病院」

欠航が多い冬季

島外で人工透析

「もう、島の土にかえることも、友達に会うこともできなくなりました」。今月十五日午後、利尻島国保中央病院を退院した中村ツイさん(七三)は「業病」という言葉を何度も口にした。糖尿病が進んで人工透析が必要になり、生まれ育った島を離れる日が近い。

二十三年前、夫に先立たれ、女手一つで子供を育て上げた。しわだらけの手に、苦労が刻まれている。まもなく、会社員の長男(四五)の住む滋賀から通えるが、船や航空機の欠航の多い冬季は、どうしても島外で暮らすことになる。

透析治療を受けるため故郷の島を離れる中村ツイさん＝利尻町・利尻島国保中央病院

根室管内羅臼町国保病院などを経て、利尻で十四年間、ホームドクターの役割を果たしている。

「年が年だから、入院患者は置かないし、救急患者の治療は難しい。手に負えない患者は沓形(国保中央病院)にお願いしている」と淡々と語る。

韓国で医師をしていた三男が、後ろ髪を引かれる思いを抑え切れない様子だった。

島の三つの医療機関のうち、宗谷管内利尻町にある国保中央病院は、同町と利尻富士町が共同で運営。医師三人が常駐し、島の医療の中核を担う。だが、都市部でさえ不足気味の透析施設は置かれていない。患者は夏の間、稚内なの専門医などのスタッフ確保や島の透析患者が十数人しかいないことなど、難問が横たわる。二町合わせても、人口一万人を切る利尻島。透析施設に限らず、小児科や眼科、耳鼻科などの整備を望む声も強い。

西野徳之同病院長は「どうすれば島全体の医療が向上するか。人口規模と病院のできることのギャップが大きすぎる」と考え込む。

利尻町の隣町、利尻富士町鴛泊にある町国保鴛泊診療所を訪ねると、韓国生まれの林新所長が看護婦に患者の血圧を測らせていた。七十七歳。

新医師＝利尻富士町国保鴛泊診療所

約二十分で、道立鬼脇病院に着く。塗装がはげ落ち、歴史を感じさせる外観だ。内部は、がらんとしている。

乗河（へいか）さん(三七)が日本の医師国家試験合格を目指し、金沢で勉強中。来春、合格すれば、後継者の道も開ける。

鴛泊からタクシーで、海岸線を島の東側に向かう。途中、小さな川にさしかかったとき、「サケがたくさん上っているよ」と運転手さんが教えてくれた。

三十二床のれっきとした「病院」だが、この日、事務室の掲示板に記された入院患者は、三人だった。道の計画では二年後、有床診療所に衣替えされる。

久保田春男院長(六三)は、全道十一の道立病院長の中で、最年長だ。外科医だが、医師一人では手術もままならないのが悩み。「麻酔科医もいないし、手術後の管理が大変。患者さんの医学知識も増えて、入院するなら『子供たちのいる札幌へ』という人が多い」と残念そうだ。

基幹病院として住民の多様な要望を満たし切れない国保中央病院、高齢の外国人医師が頼りの鴛泊診療所、医師がたった一人の「道立病院」…。島の現実に、地域医療の重い課題が透けて見える。

限られた医療資源を活用するには、医療機関と地域社会、住民の役割分担と工夫が欠かせない。

この連載企画に感想やご意見をお寄せください。〒住所、名前、年齢、職業、電話番号をお書きのうえ、ファクス011・210・5607か郵便で〒060-91　札幌市中央区大通西三、北海道新聞生活部「利尻の医療」係へ。